

名詞句産出における修飾語名詞の語順とその連想語数との関係

藤木 大介
(広島大学)

Key words : 言語産出, 語順, 名詞句

人間が言語を産出する際、その語順はどのようにして決定されるのだろうか。

複数の修飾語からなる名詞句の産出に関しては、佐伯(1975)などが、用例数の分析から、長い修飾成分は前置されやすいことを指摘している。例えば、「[キャンパスが巨大な] [田舎の]大学」とはなりやすいが、「[田舎の][キャンパスが巨大な]大学」とはなりにくいということである。この理由として、佐伯(1975, p. 167)は、長い成分が後ろに置かれると被修飾語となりうる候補が増えるため、産出者(話し手や書き手)がこれを避けようとするという説明している。つまり、上の例で言うと「田舎の」が「キャンパス」も「大学」も修飾できるようになるので、これを避けるということである。

さらに、同様の語順の傾向は、文の項をなす名詞句に関しても見られることが示されている。Yamashita & Chang (2001)は、主格名詞句よりも目的格名詞句の方が長い場合、主格-目的格の正規語順ではなく、目的格-主格の非正規語順で産出されることが多くなることを示している。

しかし、英語などの主要部前置の言語では、短い成分が前置されやすいことが示されている(e.g. Stallings, MacDonald, & O'Seaghdha, 1998)。また、より一般的に、イメージ容易性(imageability)など、アクセシビリティの高い要素が前置されやすいことも示されている(Bock & Richard, 1985)。

以上のように、主要部後置言語と主要部前置言語で修飾語や項の語順の傾向が対称になっているとすると、日本語では、長い要素などのアクセシビリティの低い要素が前置され、短い要素などのアクセシビリティの高いものが後置されると考えられる。つまり、複数の修飾語名詞を有する「広島山奥の大学」のような形の名詞句が産出された場合、後置された修飾語名詞の方がアクセシビリティが高いものになっている可能性が高いと考えられる。そこで本研究では、両修飾語のアクセシビリティの高さを比較するために、両語の連想語の数を測定し、比較する。

調査 1

修飾語名詞を産出し名詞句を完成させる調査を行った。

方法

参加者 大学生、大学院生 6名(男性 2名, 女性 4名), 平均年齢 23.50歳であった。

手続き 参加者に対し主要部名詞のみを呈示し、空欄を埋める形で名詞句を産出することを求めた。例えば、「()の()の犬」といったものが書かれた用紙を配布し、固有名詞や複合語は用いず、また、同じ語を2度用いずに名詞で穴埋めを行うように求めた。被験者に呈示された主要部名詞は、動物、植物、人工物を含むよう「犬」「鳥」「木」「花」「机」「道」の6語であった。

結果

産出された名詞に関し、それぞれの平均文字数は前置名詞で2.18(SD = 0.90)、後置名詞で2.18(SD = 1.31)であり、この平均文字数の間に差は認められなかった。また、それぞれの平均モーラ数は前置名詞で3.35(SD = 0.95)、後置名詞で3.30(SD = 1.11)であった。この平均モーラ数の間にも有意な差は認められなかった($t(33) = 1.48, ns$)。

以上から、各参加者が産出した修飾語から1つのリストを

作成し、合計6リストを作成した。

調査 2

調査1で産出された名詞句の修飾語に対する連想語を産出させる調査を行った。

方法

参加者 調査1には参加していない大学生、大学院生 42名(男性 15名, 女性 20名), 平均年齢 23.54歳であった。調査1で作成した各リスト毎に7名ずつが参加した。

手続き 調査1で作成したリストに含まれる語に対する連想語をできるだけ多く算出するように求めた。これらの単語はA4用紙の最上部に1語のみ記され、その下に33語分の下線が引かれていた。用紙は参加者毎にランダムに並べられ、冊子状になっていた。

実験計画 被験者内1要因計画で、前置名詞条件と後置名詞条件を設けた。

結果

被験者毎の連想語の平均は前置名詞で13.31(SD = 5.92)、後置名詞で11.93(SD = 5.12)であった。これらの間に差があるかを調べるため、実験計画に基づく t 検定を行った結果、被験者分析で有意な差($t_{\text{subject}}(41) = 2.79, p < .01$)、項目分析で有意な差の傾向($t_{\text{item}}(32) = 1.70, p < .10$)であることが分かった。したがって、連想語の数は前置名詞に対するものの方が後置名詞に対するものよりも多かったと言える。

考察

本研究の結果は、予測と異なり、アクセシビリティの高い、つまり連想語の多い修飾語が前置された。Stallings et al (1998)は、McDonald, Bock, & Kelly (1993)において単語そのものの長さでは語順に影響がなかったことをふまえ、言語を産出する際の語順の決定は、単語レベルでなされるものと、統語的なレベルでなされるものがあることを指摘している。これにしたがうと、本研究のような単語のレベルでは言語間の差はなく、アクセシビリティの高い語が前置される傾向があると考えられる。それに対し、句などの統語レベルでは、言語の統語的な性質が影響し、語順の傾向に差が出るのかもしれない。この点に関しては、今後より詳しく検討する必要があるだろう。

引用文献

- Bock, J. K., & Richard, K. W. (1985). Conceptual accessibility and syntactic structure in sentence formation, *Cognition*, **21**, 47-67.
- McDonald, J. L., Bock, K., & Kelly, M. H. (1993). Word and world order: Semantic, phonological, and metrical determinants of serial position. *Cognitive Psychology*, **25**, 188-230.
- 佐伯哲夫 (1975) 現代日本語の語順 東京: 風間書院
- Stallings, L. M., MacDonald, M. C., & O'Seaghdha, P. G. (1998). Phrasal ordering constraints in sentence production: Phrase length and verb disposition in heavy-NP shift. *Journal of Memory and Language*, **39**, 392-417.
- Yamashita, H., & Chang, F. (2001). "Long before short" preference in the production of a head-final language. *Cognition*, **81**, B45-B55.

(FUJIKI Daisuke)